



TITLE:

<大會抄録>イラン立憲革命と地域 社会:ギーラーン州アンジョマンを 中心に

AUTHOR(S):

黒田, 卓

CITATION:

黒田, 卓. <大會抄録>イラン立憲革命と地域社会:ギーラーン州アンジョマンを中心に. 東洋史研究 1991, 50(3): 481-482

ISSUE DATE:

1991-12-31

URL:

<https://doi.org/10.14989/154369>

RIGHT:

ジャワ島プリアンガン地方のコーヒー義務供出制度と住民——一八二〇年代末の人口統計から——

大橋 厚子

コーヒー義務供出制度に關しては、これまで在地の支配關係の溫存強化や夫役勞働の使用といった、現地社會の變化を抑制する側面が注目されてきた。しかしコーヒー生産と輸送の組織形態に着目するならば、この制度は一八世紀後半から一八二〇年代にかけて改變され、影響は住民の生活にまで及んだ。コーヒー栽培地區の限定による生産の集中管理が實施される一方で、輸送が營利を目的とする業者や住民の手に委ねられたのである。

この影響を一八二〇年代末の統計を利用して概観すると、オランダ植民地政廳が一八世紀初頭に整備した行政地區である「郡」は、邊境に設置されたものを除き、次のいずれかの特徴を備えていた。一、山裾の人口稠密な地域。水田地帯であるが餘剰は少なく、住民は山麓の農園でコーヒー栽培に従事する。二、コーヒー輸送の據點。男子の人口が多いがコーヒー・米とも生産量は少ない。三、盆地底部の水田地帯。コーヒー生産をほとんど行わず、一と二へ米を供給する餘力を持つ。

このような「郡」の間での機能の分化は一八世紀初頭以來の政廳のコーヒー政策と符合し、これが定着したことを示す。ただし政廳は、政策を權力で強制することは少なく、常に現地社會の動向を巧みに利用してきたので、政策の定着の實態を明らかにするために

は現地社會の諸階層の動向の把握が不可欠となる。

イラン立憲革命と地域社會
——ギラーン州アンジォマンを中心に——

黒田 卓

アンジォマンは、イラン立憲革命期（一九〇五—一九一一年）、とくに第一次立憲制期（一九〇六—一九〇八年）には、獨自の政治目標を追求したり、特定の階層の利害を代辯する政治結社としての性格を強めた。首都および地方都市で急増するアンジォマンに對して、新たに開設された國民議會は、一九〇七年五月六日公布の州アンジォマン法、同年一〇月制定の憲法補則において、アンジォマンを「公的」なものと「非公的」なものに二大別し、前者に地方行政の一端を擔う役割を付與した。つまり、「公的」アンジォマンを、國王專制體制の地方での象徴的存在たる知事權力に對抗する勢力として育成することを意圖したのである。

報告者はかつてカスピ海南西岸に位置するギラーン州を事例に、このような州アンジォマンの結成過程や人的構成を考察したことがあるが、その際州アンジォマン自體の史料を充分に利用することができなかった。そこで今回の報告では、その缺を補う意味で、州アンジォマンの發行した二種の新聞、*Arjomand-e Melli-ye Velayati-ye Gilan*（一九〇七年八月三十一日—同年九月三〇日まで發行）と *Gilan*（一九〇八年一月二日—同年六月三日）を主な素

材に、州アンジョマンの實態解明を試みる。まず新聞發行にまつわる基礎的データを紹介した上で、州アンジョマンの討議と活動の基本的パターン、州知事を頂點とする舊來の權力構造における州アンジョマンの法制的位置と實相、州アンジョマンと他の社會階層、社會集團との相互關係、などを取り上げる。これらの検討を通じて、立憲制施行が地域社會にもつていた意味を考えてみたい。

ヒムヤル王國トゥツバア朝の性格について

部 勇 造

前イスラーム期の南アラビアに關する傳承を記した中世のアラビア語史料によると、西曆二〇〇年前後からこの地のヒムヤル王國は、トゥツバア朝と呼ばれる強力な新王朝によって支配されていたという。從來の研究者達はこの王朝を、當時の碑銘文史料より知られる實在のヒムヤルの王朝に比定しようと試みていずれも失敗した。ところで同じく碑銘文史料によれば、まさにこの同じ時期に、紅海の對岸のアビシニアよりアクスム王國軍のアラビア半島への進出が始まっている。彼等は南アラビア諸王國間の争いに巧みに乗じて勢力を伸ばし、三世紀末に實現したヒムヤル王の南アラビア統一にも一役買ったのではないかと思われる。そこで試みに、アラビア語で傳わるトゥツバア朝の王の名を、ゲズ語で傳わる同時期のアクスム王の名と比較したところ、多くの場合前者は後者のアラビア語譯であることが判明した。つまり傳承上のトゥツバア朝の支配者

の多くは、實は歴史上のアクスム王であった譯であり、そこからイスラーム化に先立つ數世紀の間、ヒムヤルはアクスムの宗主權下に置かれていたのではないか、との假説を立てることが可能になった。本發表では、さらにこの説の傍證をいくつか挙げるとともに、このアクスム・ヒムヤル關係が、前イスラーム期の西アジア史において有する意義にも言及する。

成化朝初期における吏部權限縮小論をめぐって

阪 倉 篤 秀

成化朝の初期、四年二月御史大夫戴用によって六項目の上奏がなされた。うち三項は吏部に關わり、「精考察」と題するものは、朝覲考察において從來の吏部・都察院に加えて巡撫による實地調査をもとにした考察を並行的に行うこと、「公薦擧」では、當時吏部が掌握していた在京堂上官ならびに方面官の人事を、内閣及び各堂上官の推薦・協議に委ねること、「均爵賞」では、人事面で吏部屬官の優遇を是正するよう提言している。ここには吏部權限を抑制しようとする意圖が認められるが、それにもまして成化帝は「公薦擧」での提言内容をさらにすすめて、在京四品以上の官は皇帝特簡に、方面官については保舉制を採用するとした。これが内閣の意向を反映したものであったことはいうまでもないが、吏部にとっては權限の縮小に直接つながる重大問題であった。にもかかわらず、吏部には表立った對抗の動きは見られず、かろうじて御史大夫劉壁が